

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 甲第 2675 号

Parachute technique for portal vein reconstruction during pancreaticoduodenectomy with portal vein resection in patients with pancreatic head cancer

膵頭部癌に対する門脈合併切除を伴う膵頭十二指腸切除術におけるパラシュート法を用いた端々吻合による門脈再建手技に関する検討

入江 彰一 (いりえ しょういち)

博士 (医学)

論文審査結果の要旨

本論文は、肝胆道領域手術において、腫瘍が膵頭体部にある場合、解剖学的な位置関係から、門脈浸潤を受けやすく、門脈合併切除を伴う膵頭十二指腸切除術 (PD) を施行する症例が多い。これまでに門脈再建法に関しては、切離長が長い場合、端々吻合がよいかグラフト間置がよいかについては議論がある。本研究の目的は、比較的長い門脈切除距離を再建する際に、パラシュート法が、安全かつ有効な方法かを検討するものである。2014 年 1 月から 2019 年 3 月の期間に、膵癌に対して、門脈切除を伴う PD を施行した症例において、パラシュート法によって門脈再建を行った患者に対して、術後短期成績と再建門脈開存率について検討した。PV 切除長は中央値 5cm、術後合併症率 (Clavian-Dindo 分類 \geq IIIa) は 7% であった。また、術後 1 年間の再建 PV 開存率は 87% であった。門脈切除再建時のパラシュート法は、自家グラフトを用いずに、比較的長い再建距離においても、安全に施行可能である。血管合併切除を伴う PD は、合併症が多く、一般的に普及していなかったが、近年では化学療法や、手術手技の進歩により、その安全性が担保され、見直され始めている。血管合併切除により、surgical margin を確保し、R0 切除が可能となり予後改善が期待できる。こういった現状において、パラシュート法は、シンプルかつ安全に施行できる手技であることを初めて明らかにした臨床的に意義ある論文である。

よって、本論文は博士 (医学) の学位を授与するに値するものと判定した。